

人と動物の絆の会。イルカを通して川・海の環境保全を目的に人・文化の交流実施

HAB21イルカ研究会 代表 岩重 慶一

「カンボジア・メコン川のイラワジイルカを守り、地域振興の拠点「イルカの学校」作りに向けた活動」

夢のイルカの学校がオープン！

仲間と一緒に夢を形にHAB21センターの設立

(なぜ私たちがカンボジアでイルカ保護センターを設立したか？)



サラリーマンのノウハウをメコン川イルカの保護活動に活かす

1991年の春、私は三菱信託銀行の融資の担当として多忙な毎日を送っていました。そんな私をご覧になって神様が「たまには休ませないと・・・」と思われたのでしょうか。初めて入院を経験しました。その時、ふと少年時代に鹿児島錦江湾で遊んだイルカのことを記憶の底から蘇ったのです。「僕らが少年時代、釣りをして出会ったあのイルカを今の子どもたちにもみせたいなあ」。そう思い、志を同じくする高校の同窓生たちと「HAB21イルカ研究会」を設立しました。43歳のときです。10年が経ち、今年6月30日にやっとクラチェにイルカの学校が完成。正式名は「HAB21センター」と命名しましたHABは、Human Animal Bond(人と動物の絆)の略、21は21世紀へ向けての意味ですが、読むとハブですからハブ空港などというときのハブ、つまり拠点という意味も兼ねるのです。伊豆諸島の御蔵島で村人と交流を深め学び、イルカとも泳ぎ、森で、川でゆっくり遊び、楽しみました。島のツゲの木やシイの木の巨木を観察し、

緑を守りながらの海の環境保全を訴え続けました。そして人の交流から学び、知識も吸収する中でカンボジアのメコン川に棲息する「イラワジイルカ」のことを知ったわけです。

これまで絶滅に瀕しているメコン川イルカの保護についてセミナーをカンボジアと横浜で開いて市民に訴えました。なぜ、イルカを守るのか、なぜイルカを見て楽しむ人が世界にいるのかなど、イルカが動物であることを知らない村民に教えることは大変でした。イルカの泳ぐ姿を、筏に乗って見せたり、映像に撮って瞬時に、世界中に発信できたら観光収入に繋がり村おこしに役立ち、メコン川の自然環境を持続的に守るシンボルになることなどを村人と行政の人たちに熱っぽく説いてきました。センターの完成でいよいよ具体的な行動プログラムが「2002モイモイプロジェクト」としてスタートします。(モイモイとはカンボジア語でゆっくりの意味)



写真1

イルカの学校はどこ?どんなもの? だれが、何をするのか?

カンボジア王国の首都プノンペン(人口約100万人)からイルカの学校のあるクラチェ州(人口15万人)の最終港町クラチェまでは、車と船で約6時間、国道5号線をコンボンチャムまでひたすら北に走る。地平線に向かってまっすぐ消えていく道。穀倉地帯に水牛たちが戯れていた。全くと言っていいほど起伏ないことに驚く。コンボンチャム港から船で3時間程美しいメコン川を北へ遡る。



写真2 学校の前

イルカの学校「HAB21センター」は港町クラチェ市の中心、役所に隣接した敷地1,000坪、木造平屋120坪、私たちが出資した建設費は約300万円。学校の中には事務所のほか研究室、資料室や野生動物の解剖室、セミナー教室、その他10人ほどが泊まれる竹で編んだベッドを備えたお部屋も作りました。教室にはまだ机とイスもありません。クーラーもありません。ゴザを敷いて、竹を編んで工夫しているところです。

ここでは、イルカ研究だけでなく、魚の種類を調べ標本も見せて、海外から訪れる観光客にクラチ

エの歴史や、遺跡やパゴダについて説明できるように子どもたちにガイドの講習や文字を教えます。漁民には、政府とともに網の使用方法和適切な網の提供とそれらの指導を行います。建物については、敷地内に政府の管理事務所をつくって、役人を常駐させ、建物の管理をしてもらうことにしました。

イルカの学校で学ぶ

これまで横浜や鹿児島や御蔵島で「イルカの学校」を開き、イルカの学者さんや水族館の専門家に学び、子どもたちと御蔵島のイルカと泳ぎ、楽しみながら「野生のイルカ」をよく知るために、勉強してきました。先生が生徒か、生徒が先生か分からないメダカの学校のように、みんな仲良く体験学習しながら多くのHAB仲間に支えられてきました。昨年6月、クラチェに長年の夢が実現できたことは、私たちの自助努力による資金提供とそれを支えてきた日本とカンボジアのイルカ大好き人間たちのおかげです。

また、横浜市と市民の支援があってこそできたことだと感謝しております。会員を増やすことはせず、「イルカの学校」というだれでも好きな人が集まってイルカのこと、子どものこと、ストレスで疲れることなどを話す勉強会に参加された方が会員という考え方をもっていましたから、イヤになったらいつでも解散しようといみんなにに言って、つづけてきました。しかしいつも参加して下さった人がスタッフになってくださり、人と人の交流が財産となりました。そんな市民の活動に対して、横浜市から国際環境市民活動賞、神奈川県から地球環境賞をそれぞれ受賞。さらに昨年の暮れに、カンボジア政府から国際環境貢献賞とフンセン首相から感謝状が贈られ、国際NGOとして認められ、誇りと責任を感じております。

人と動物の絆の会。イルカを通して川・海的环境保全を目的に人・文化の交流実施

HAB21イルカ研究会 代表 岩重 慶一

メコン川のイラワジイルカ

(保護活動は、教育と資金づくりのリンクが必要)

カワゴンドウの仲間のイラワジイルカは、東南アジアやオーストラリア北部の沿岸や河川に分布しているといわれ、その実態は不明です。大きさはバンドウイルカにくらべ、小ぶりで大きい個体でも、2.5メートルです。カンボジアでは、プサウと呼ぶ。また、悲しい寓話から女性の生まれ変わりとなれ「人魚」と呼んでいます。カンピー保護区でのこれまでの調査ではすこしずつではありますが、微増しており約60頭です(2002/3月現在)。嬉しいことに、子どもが誕生し、親子のイルカが昨年より10頭確認されています。

このイルカは長引く内戦でまさに絶滅の危機に瀕していました。しかも研究どころか保護活動などだれも手をつけませんでした。それなら自分がやろうと。ポルポトとの内戦でプノンペンの町でも銃撃戦がまだある1996年から現地調査を開始しました。97年末現地で国際イルカ会議を開きカンピー地区を保護区に設定することに成功しました。その後、航行する船の交通整理や密漁の取り締るためパトロールボートを提供。ポスター看板の製

作から設置まで現地の人とともに働きました。自分たちでできることとできないこともわかるように教えました。

さらに、保護区の入り口に、村の人たちとセメントでイルカのモニュメントを作り、保護区を訪れる外国の人にもわかりやすくしました。

活動を本にして、資金作り

(自然保護の根底に必要なのは「他の生命への思いやり」)

カンボジアのメコン川イルカをダイナマイト漁法の禁止や密漁を防止するためのキャンペーンとして絵本「おでこちゃんとイルカの願い」を出版しました。きっかけは私が長年、イルカと泳いで感じたことや毎年泳ぐ度に汚くなる海を見て悲しくなったことなどを好きなイラストで表現して描きました。この本を出版した後、「人とイルカの関わり」について専門的に勉強しようと、私は50歳のとき東京水産大学大学院に社会人入学。資源管理学の修士号を取得しました。今、同大学の客員教授になり、東京大学大学院農学生命科学研究科の研究員にもなっています。



写真3 第1回クラチェでの国際イルカ会議

私は海やイルカを知ることより先に感じることもまたは感動する力が重要だと思います。私がダイバーとしてこれまで感じたことを絵本の中の文では「おでちゃん 海のなかって^{ゆうき}勇気があるだろうけど 自分のからだで ふれること かんじることが ほんとうに 学ぶことなんだ」と書きました。

次に、メコン川イルカや自然の保護を考える前に、人間に対しても自然に対してもお互い様という思いやりの心が必要だと思います。言い換えれば、海への思いやり、他の生命への思いやりです。「おでちゃん 悲しみもわかちあってほしいんだ^{そん}損をするとか徳をするとか^{あらそ}争う理由は いっぱいあるけど同じ生き物を犠牲にして ^{まんぞく}それで満足なの？」と書きました。

今年の3月、絵本に続いて「わたしたちはイルカの学校をつくった～メコンへの掛け橋～」を出版しました。この本はわたしたちのボランティア活動の記録がぎっしりつまっていますが、イルカと川と環境と人の交流を通して生活文化を知ってもらいたい。

4月から始まった子どもたちの総合学習の教材として、イルカと泳ぎ、イルカと環境について考えてもらうための入門書でもあります。私たちがつくったこれらの本の売上金が**イルカの学校**の教室の机・イス・黒板や識字教育教材として活動を支える浄財の一つにもなれたらと思っています。

今後とも、**イルカの学校**に集う人々がともに尊敬し合い、思いやりのある民間国際交流ができるように心から願っております。

今後の展望～メコンへの夢の掛け橋～

私の次の夢は、メコン川クラチェ流域を「**丸ごと水族博物館**」のように活用し、その魅力を世界の人に映像で丸ごと発信して、川の文化を再発見し

てもらおうという「イルカ保護区リバーミュージアム計画」です。HAB21センターを最初の現地情報拠点として充実させ、メコン川の持つ価値を高め、楽しく学べる仕掛けづくりを目指す。地区ごとに歴史文化の情報を収集し、ITを使って公開していく拠点を順次整備していきたい。これからも「夢は必ず実現する」を信じモイモイと続けていきたいと思います。

以上

問合せ先：Fax / Tel 045 772 9225

メール：hab21@dab.hi-ho.ne.jp

ホームページ：www.dab.hi-ho.ne.jp/hab21/